

# 【新収蔵資料紹介】

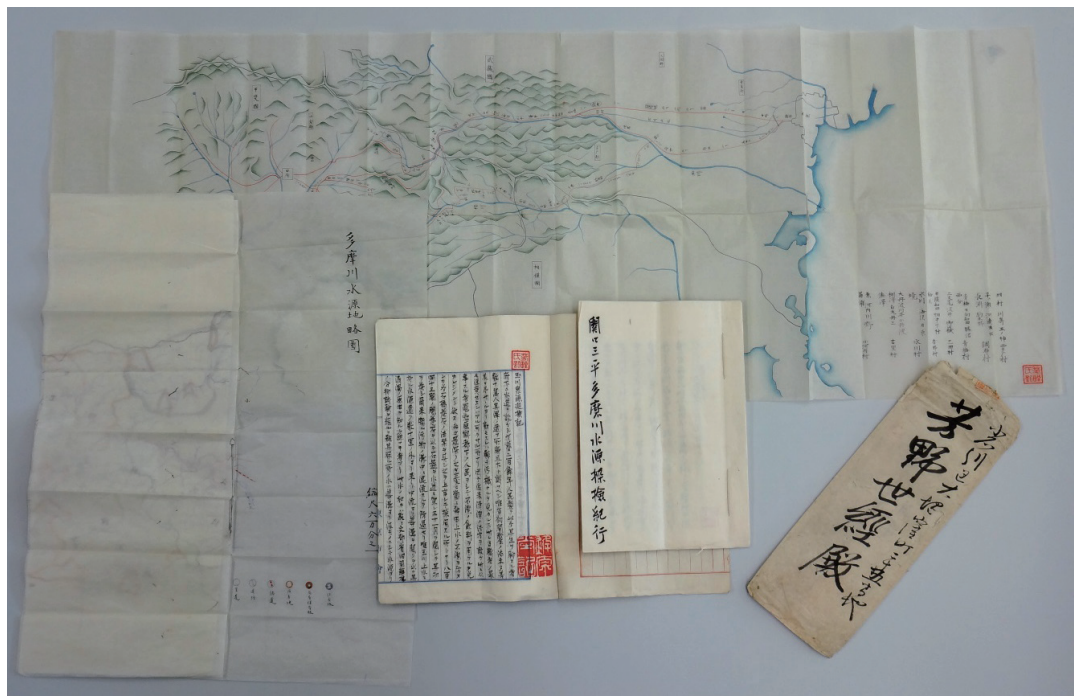
## 芳野赳夫氏旧蔵芳野世経関係資料

### 明治11年多摩川水源踏査復命書及び附図

東京都公文書館 史料編さん担当  
佐藤 佳子

#### はじめに

当館では、東京都の重要公文書を引き継ぐとともに、東京に関する歴史的資料を広く収集している。去る平成28年（2016）2月、東京府会議員として明治・大正期に活躍した芳野世経の残した明治期の水道関係資料が、ご子孫である芳野赳夫氏より寄贈されたので、その内容を紹介するとともに、本資料が芳野の手元に残された経緯を探ってみたい。



芳野世経関係資料

#### 1 資料の内容

資料（計5点）の概要は以下のとおりである。

- 1 封筒（芳野世経宛）1点  
封緘に「東京府議事課」印あり
- 2 玉川泉源巡検記<sup>\*1</sup>（明治11年多摩川水源踏査復命書写）1冊  
明治13年6月 山城祐之→松田知事宛

東京府会、東京市会野紙、「芳野氏記」印「逢原堂記」印あり  
後半に「武蔵国多摩郡多摩村ヨリ甲斐国山梨郡市野瀬マテ玉川水源野取略図」  
（羽村堰上流部分 彩色図）を付す。

- 3 関口三平多磨川水源探検紀行 1冊
- 4 多磨川水源地略図（彩色図 「芳野氏記」押印）1舗
- 5 [(多磨川水源地略図)]（彩色図）1舗

本資料は、寄贈者宅で発見された際、1封筒（芳野世経宛）に全て封入されていた<sup>※2</sup>。したがって、それが本来の文書資料の原型を伝えているとすると、ある特定の事象に関する一連の資料群であると考えられる。

1の封筒には、年代は記されておらず、郵便切手も貼付されていないことから、直接封緘印を押した東京府の議事課から届けられたものであろう。

2玉川泉源巡検記は、明治11年（1878）9月から10月にかけて実施された多磨川の源流踏査についての報告書である。調査の命を受けた山城祐之がまとめたものを、明治13年松田知事宛に再度提出したものの写しである。

3は明治11年の多磨川源流踏査に随行した関口三平がまとめた踏査の記録である。

4・5は多磨川の源流から、河口に至るまでを描いた彩色図である。

### 明治11年の水源地調査

東京では、明治時代になってからも江戸幕府から引き継いだ玉川上水を主たる飲用水として利用していた。上水の管理は明治4年（1872）から、羽村から四谷大木戸までの水源管理は翌5年から東京府の所管となったが、上水の源流がどのような状態なのかは把握できていなかった。

明治7年に行われた水道の導水路調査によれば、水路にはゴミや犬猫の死体が流れ、洗濯や水泳、雨天には汚泥、牛馬の糞までが流入している状況であった。また、市街地の水道水は、木製の樋を用いていたこともあり、樋の腐朽や周囲の汚水流入などにより汚染され、水質に問題があった。<sup>※3</sup>



羽村の堰の様子「玉川泉源巡検記」より

明治11年9月、玉川上水がしばしば濁って飲用に支障が出るという事象が問題となった上、同月15日、暴風雨により多磨川からの上水取り入れ口にある羽村大堰が大破してしまう。こうした状況下で水源調査が行われることになったのである。

調査を命じられた山城祐之は天保8年（1837）生、鹿児島県士族。会津攻めで勲功をたて、明治4年（1871）東京府に入り、同32年に非職となるまで、橋や水道、



資料が保管されていた書物筆筒



資料に押捺された「逢原堂記」印  
逢原堂は芳野世経の号

道路の建設など、土木技術官僚として活躍した。この間に、皇居造営や碓井峠の開削にも携わっている。<sup>※4</sup>

山城に随行した関口三平は天保2年（1831）生、幕臣。明治元年に上水屋敷改下役として東京府に入り、営繕司、土木司等を経て、明治27年（1894）まで東京府に土木技術官僚として勤務するほか、島根県出雲大社造営や、千川水道再興、玉川上水の工事などにも関わっている。<sup>※5</sup>

山城の提出した玉川泉源巡検記と関口の記した多磨川水源探検紀行によると、調査行程は以下のとおりである。羽村を起点とし、往路4日、復路2日の行程となっている。

9月27日 午前8時羽村（多摩村）出立、9時青梅で小休—玉川沿岸—万年橋—奥沢川（二俣尾・沢井村）—高橋・御嶽川—川井村・音無川—小丹波村—棚沢村—白丸村・下海沢村—氷川村—日原川—氷川本村泊（旅店原政五郎家）

9月28日 午前7時氷川本村出立—境村—原村・小河内温泉—河内村—河野村—留浦村—山梨県都留郡丹波山村—高橋・不動滝—丹波山本村泊（守岡栄左衛門）

9月29日 午前6時丹波山本村出立—大萩谷橋・小萩谷橋・余慶橋・羽音渡橋・舟越橋・小宝橋・黒川橋—吉野谷—響音橋・大東橋・三里橋—神金村落合組（案内人田辺悉匡居住）—犬切峠—一ノ瀬泊（一ノ瀬組田辺利重：悉匡子息）

9月30日 午前7時半田辺宅出立（猛獣予防のため猟師楠藤五郎を雇う）字角力取に登る—一字水干（御影大石）=玉川真源湧出地—午前11時半 帰路—田辺利重方で小休—犬切峠—5時落合着 泊（田辺悉匡旅人宿）

10月1日 午前7時落合出立—原村泊（原島小一郎）

10月2日 午前6時原村出立—午後5時過羽村着—午後7時旅宿—即時帰途

10月3日 曉帰宅—府庁出頭

この踏査の約二か月後（明治11年12月1日）には「神田玉川両上水水源取締仮規則」<sup>※6</sup>が施行され、水質保全のために漁獵、遊泳、洗濯、ごみの投棄、汚水の混入や上水堤上の竹木伐採などが禁じられた。

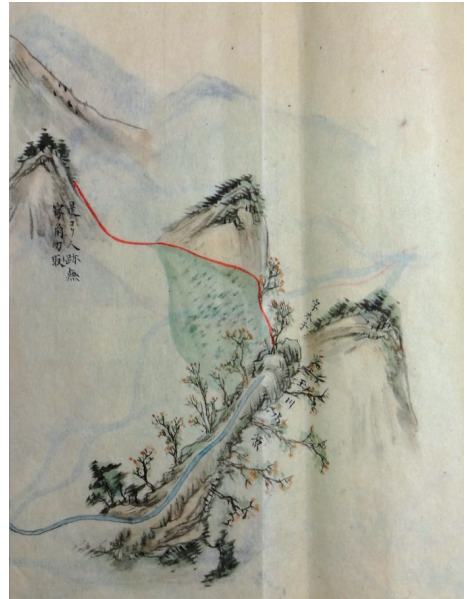
## 2 資料作成の時期とその目的

ただし今回寄贈された資料は、水源踏査実施当時のものではない。明治13年6月、東京府知事松田道之に提出された復命書の写しを、さらに書き写したものである。

封筒には「東京府議事課」印が封緘印として押されている。「東京府議事課」は、明治19年（1886）7月28日に設置され、明治23年（1890）10月まで存在していた<sup>※7</sup>。

さらに、玉川泉源巡検記の用紙には、一部東京市会の用箋が用いられていることから、東京市会が設置された明治22年<sup>※8</sup>以降に筆写されたものと考えられる。

以上のことから、本資料群の作成時期は、明治22年から23年とみてよいだろう。



水源地の様子「玉川泉源巡検記」より

それではなぜ、この資料は芳野世経に届けられたのだろうか。受取人である芳野の経歴をたどってみよう。

芳野世経は、嘉永2年（1849）11月27日、文久の三博士として知られる幕末期の儒学者芳野金陵の四男として生まれた。兄達が若くして亡くなったため、父の跡を継ぎ、幕末には昌平黌の助教となる。

維新後金陵が小石川区大塚窪町の自邸に開いた家塾逢原堂でも教鞭をとり、明治11年私立逢原学校を開設した。同34年には、邸地（小石川区大塚窪町25番地 現文京区大塚三丁目29番地）を文部省へ寄付し、同36年（1903）東京高等師範学校の校地となった<sup>\*9</sup>。

性格は温厚篤実勤儉質直かつ理路整然としており、信用が篤かった。明治24年（1891）刊行の人物評<sup>\*10</sup>によれば、質素な綿の着物に小倉の袴を着し、結髪（＝丁髷）をやめなかったが、偏固ではなく、衣服にこだわらないためだと評されている。

明治11年に開設された東京府会に推されて議員に当選、その後当選を重ね、通算26年間府会で活躍したほか、小石川区会議員、地方衛生会委員、市区改正委員、東京市参事会員、衆議院議員、東京府会議長、東京府教育会長などの要職を歴任し、昭和2年（1927）に没するまで、永く東京の政治・教育に尽くした。その功績を称え、公同事業（地方自治・行政）の功労者として、明治27年（1894）藍綬褒章を授与された他、没後従五位を追賜されている<sup>\*11</sup>。寄贈資料は、芳野のこうした職務に関連した資料であることが推測される。

次に、資料が作成されたと思われる明治22、23年前後の、玉川上水をめぐる動きから作成の目的を検討する。

### 伝染病の流行と水道設備の近代化

明治19年夏、玉川上水をめぐって大問題が発生した。致死率や伝染性の高さで恐れられていた伝染病、コレラが大流行したのである。コレラは幕末から何度か流行を見ているが、この年は東京府域で合計12,262人の患者が発生し、内9,967人が死亡した。実に致死率81%に達し、明治期における最大の流行となった。そんな中、多摩川の上流地域で、コレラ患者の汚穢物を水源となる川で洗濯したものがいるという風聞が伝わった<sup>\*12</sup>のである。調査の結果、幸い別の川筋であったことが判明したので事なきを得たが、これが一つの契機となり、政府は水道水源や水質の管理をより厳重に行なえるよう、近代的な水道施設整備に取り組んでいくこととなる。

明治21年（1888）10月、東京市区改正委員会は、上水改良設計を御雇外国人バルトン等に囑託した。同年12月に第一報告書（東京市区上水設計第一報告）が委員会へ提出された。続いて23年3月に第二報告書が提出され、これに基づき市区改正事業として「東京市水道設計」が告示された。当時の東京市の人口150万人へ給水するため、千駄ヶ谷村に浄水施設を設置することとなったのである。さらに計画の再検討を経て、近代的な浄水設備は最終的に淀橋浄水場<sup>\*13</sup>として明治31年（1898）に完成した。



芳野世経  
『東京府史』府会篇第一



「芳野氏記」印  
全ての資料に押されている

## 水道改良設計の検討と芳野世経

一方、芳野は、明治18年12月28日に府会議員に当選（三回目）、同時に地方衛生会委員に就任し、翌19年のコレラ流行時も含め、明治20年まで委員を務めている。

また、明治21年には東京市区改正委員に当選し、翌22年に同委員会の幹事に就任、上記上水改良設計検討時には委員長の職にあった。

これらのことから、今回寄贈された芳野世経関係資料は、明治22年から翌23年頃、東京市の上水改良設計を検討する参考資料として、東京府議事課から市区改正委員幹事もしくは委員長であった芳野世経にあてて送られたものであった可能性が極めて高いと考えられる。

## おわりに

本資料群は、すでに整理を完了している。東京の水道事業が、江戸期の蓄積の上に立ちつつ、近代的な水道事業へと姿をかえていく、その転換期において作成された貴重な歴史資料をぜひご覧いただきたい。

### 〈情報検索システム URL〉

<http://www.archives.metro.tokyo.jp/detail/3029697?smode=1&tsNo=1&lbc=-1&p=-1>

- ※1 本資料については『東京市史稿』上水篇第2に翻刻されており、原本は東京都水道歴史館（東京都文京区本郷2-7-1）に所蔵されている。
- ※2 寄贈者芳野起夫様（世経の孫にあたる）の情報提供による。
- ※3 東京都水道局『東京近代水道百年史 通史』平成11年 6-7頁
- ※4 「退職者履歴 明治32年 山城祐之」明治32年『第1種 内局\*退職・死亡者履歴書・全1冊』（東京府文書 請求番号601.D4.16）
- ※5 「転免履歴 属、技手 関口三平」明治27年『第1種 秘書\*転免履歴・冊ノ14』（東京府文書 請求番号601.C3.02）
- ※6 東京市役所『東京市史稿』上水篇第2 大正12年 599-600頁
- ※7 「東京府組織の変遷 明治19年～明治45年・大正元年：1886-1912」東京都公文書館HP [http://www.soumu.metro.tokyo.jp/01soumu/archives/0702f\\_hensen\\_m2.htm#M19](http://www.soumu.metro.tokyo.jp/01soumu/archives/0702f_hensen_m2.htm#M19)（2016年2月15日閲覧）
- ※8 第一回東京市会の開会は明治22年6月8日である（東京都総務局総務部『東京百年史』別巻・年表索引（昭和54年））。
- ※9 同校は昭和24年（1948）東京教育大学となるが、同大学が筑波学園研究都市へ移転したのち、昭和61年（1986）から文京区立教育の森公園となっている。
- ※10 篠田正作編『明治新立志編』鐘美堂 明治24年 28-31頁
- ※11 「共同事業功労者位階追賜の儀具申 東京市小石川区大塚新坂下町 芳野世経」昭和2年『篤行者表彰 冊の22』（東京府文書 請求番号307.F2.02）
- ※12 東京都『東京市史稿』市街篇第71 昭和55年 143-144頁
- ※13 淀橋浄水場は、昭和40年（1965）廃止され、その跡地（現新宿区西新宿二丁目）には、現在京王プラザホテルや都庁舎など、高層ビルが立ち並んでいる。